



カンボジアの子どもたちは明るく、ひとみの輝きはまぶしいほど



目標をもって勉学に励んでいる子供センターの子どもたち



一緒に折り紙を折り、心を交わせた

CVSG第一自立村で、子どもたちにお菓子を配る参加者ら



平和・懸命に生きることの大切さ学ぶ

少年少女カンボジア国際交流事業

瀬戸内市在住の中学生15人が1月5～9日の5日間、市少年少女カンボジア国際交流事業に参加しました。交流事業の目的は、子どもたちにカンボジアの実情を知ってもらい、世界には助けを必要とする子どもたちがたくさんいることを学び、自分たちに何ができるかを考え、ボランティア精神やグローバルな考え方を身に付けてもらうことにあります。参加した3人の感想を紹介します。(敬称略)



スケジュール

- 1月5日
市役所出発
シェムリアップ着
- 1月6日
アキラの地雷博物館見学
CVSG(カンボジアの村を支援する会)
地雷障害者支援センターで交流
CVSG子供センター訪問
シェムリアップ孤児院訪問
公立小・中学校訪問
クメール織物工場見学
- 1月7日
CVSG第一自立村で井戸掘り体験
と交流
ジャックフルーツ植樹
トンレサップ湖遊覧
レストラン学校交流
- 1月8日
アンコールトム・タプローム・
アンコールワット見学
シェムリアップ発
- 1月9日
市役所着

世界の国々をもっと知り 日本の本当の姿を見つめ直したい

長船中学校 3年 沖津 ほのか



学校でカンボジア国際交流事業のプリントをもらった時、「ああ、行きたい!」と思いました。それは、私の中にいろんな世界を見てみたいという気持ちがあったからです。しかし私は受験生。ラストスパートをかける大切な時間を、勉強以外に費やすことは正直不安でした。でも、勉強よりも大切な何かがあるような気がして、母に相談しました。「行つておいでよ。勉強だけが全てじゃないよ」という母の返事。家族の理解を得られた私は、迷いを捨ててカンボジア行きを決意しました。

カンボジアに行くまでの私は、カンボジアという国についての知識はほとんどありませんでした。事前打ち合わせでもらった資料と、説明を聞いて、初めてカンボジアの歴史を知りました。「戦争」や「地雷」などといった、非平和的な言葉が何度も登場し、カンボジア行きに少し恐れを感じるほどでした。しかしその反面、平和の大切さを教えてくれたのも事実です。カンボジ

アを知れば知るほど、カンボジア行きに対しての使命感が強くなりました。私にできる事は、本当に小さな事かもしれないけれど、厳しい環境の中で生きている人たちの役に立ったり、子どもたちに楽しい時間を過ごしてもらったりできるよ

うに、歌や折り紙の折り方を練習しました。

そして私は、はりきってカンボジアに向かいました。実際カンボジアに行つて、簡単には語りつくせないほどたくさんさんの貴重な体験をしました。それと同時に、色あせることのない思い出を手にもすることができました。

その数え切れない思い出の中でも、特に印象に残る出来事が一つあります。それは、CVSGの施設で出会った子どもの話です。その施設では、私たちと同じくらいの年の人が集団で生活をしていました。代表の村田さんがそこに住んでいる人たちを紹介してくれた時、一人の男の子が「何でもいいから一番になりたい」と言っているのを聞きました。その男の子は医者になりたいらしく、「カンボジア一の医者になりたいんだ」と目を輝かせていました。「一番」。その言葉が私の心に強く響きました。

今この日本は、一生懸命とか、がむしゃらにとか、真面目にしているとかえって馬鹿にされたり、かっこ悪いと言われたりしてしまいます。私も知らず知らずになんか間違った考え方にまひしてしまいました。しかし、一生懸命に生きることや、



レストラン学校の子どもから日本語で書かれた手紙をもらい、笑顔の沖津さん(左)